

# 加賀の古九谷誕生の道

—— 前田利常の関与とキリシタンマークを視点として ——

## Reconsidering the Birth of Ko-kutani Porcelain in Kaga Region:

Maeda Toshitune and Covert Symbols of Christianity

孫 崎 紀 子

公立小松大学非常勤講師

**Abstract:** Ko-Kutani is a type of porcelain well known for its unique design from a region formerly called Kaga Province in present-day Ishikawa prefecture. Its origins are most often traced to Kutani Village, where the Lord of Daishoji-han Maeda Toshiharu ordered the kiln making and porcelain production has been attributed to Goto Saijiro in 1655; who oversaw the kiln (Kutani-koyo) for approximately fifty years. Taking into account the particular historical background with ties to Christianity which could not be revealed at the time, for the first time, the study suggests that the creation of Ko-kutani may instead have happened earlier in Rendaiji village, under a concealed order of the Lord of Kaga-han Maeda Toshitsune.

**Keywords:** Christianity in Kaga, Daishoji-han, Ko-kutani, Rendaiji, Toshitsune

### はじめに

加賀藩は、1807年（文化4）4月 金沢の春日山に京都から青木木米を招き、色絵磁器制作を始めた『加賀藩史料』（第十一編）。これ以降の色絵磁器は、再興九谷あるいは九谷焼とよばれる。以来、南加賀では様々な九谷焼の窯が生まれた。九谷焼は1877年（明治10年）～1877年（明治20年）ころには輸出陶器日本一となり、ジャパニクタニという呼び名も生まれた。その伝統は現在も受け継がれ、南加賀には多くの九谷焼作家が活躍している。

山中温泉より13キロほど山奥にある九谷村には、九谷古窯の遺跡がある。大聖寺藩は1693年（元禄6）火災があり開窯時の記録は残っていない。しかしその後、『重修加越能大路水経』（原著 土屋義休 大澤君山による『重修』は1736年（享保2））には、「此山中谷ヲ九谷ト云明暦年中實性公後藤氏ニ命シテ土器ヲ焼シメシ所也又其外ノ焼物有南京焼ニ同ジ中頃制禁アリ今ハ絶タリ」とあり、大聖寺初代藩主前田利治が、明暦年間に後藤才次郎に命じて九谷で土器を焼かせたとい

う事が書かれ、『芟憩紀聞』（塚谷沢右衛門五明著 1803 年（享和 3））には、「九谷焼ハ後藤が焼きたるにはあらず。田村権左右衛門と云うもの焼きたりと云。九谷の宮に花瓶一對あり。田村権左右衛門明暦元年六月二十六日と藍にて有。是は焼もの手初に此瓶を焼き、奉納したると云伝。」と書かれている。この花瓶は現存し、破損はあるものの藍で書かれた田村権左右衛門明暦元年六月二十六日は、はっきりと読める。この二つの記述より、九谷村では 1655 年（明暦 1）頃に、藩主の命により後藤才次郎が、また田村権左右衛門が関与して焼物が始められたということがわかる。後藤は窯そのものの制作、田村は製陶に携わったようにみえる。この開窯の時期の明瞭な事とはうらはらに、わずか 50 年ほど後の、それが何年かも理由も定かではないその閉窯は、対照的である。しかも制禁あり、とされ、藩命により開窯した後藤才次郎の晩年は、罪人が乗る唐丸籠で九谷村から大聖寺まで運ばれ、その処分もあきらかではない。にも拘わらず、後藤才次郎と田村権左右衛門の位牌は前田家の菩提寺である実性院に歴代藩主とともに納められている。

一体なにがあったのであろうか。

その独特の色の使い方や雰囲気、示唆に富んだ図柄、意表を突く意匠、また古九谷大皿には、題材を中国の書物からとったものや、門外不出であった狩野派、それも探幽の下絵をそのまま写したものもある。そして、そこにはキリシタンマークが色絵で描きこまれている。当時、色絵は明にしかなかった。そして明は、1644 年滅亡する。この時、明の陶工の海外逃亡があったことは、『バタヴィア城日誌』にも見える。鎖国中の日本に、色絵技術を持つ陶工が長崎を経て有田皿山にたどり着くことは容易に考えられる。この明陶工の色絵技術は、有田に伝わり、うちいくらかが、有田皿山から加賀藩へ手配され技術を伝えた。加賀、蓮代寺には受け手があり、その地でキリシタンマークを持つ古九谷大皿が誕生した。古九谷大皿に使われている素地の作られたヤンベタ窯の開窯と、古九谷大皿は色絵であるので、その上絵窯には炭を必要とするが、その炭の供給状況を見ると、古九谷誕生の時期は九谷村開窯よりも 5～10 年はやい。

古九谷大皿は、蓮代寺のどこでつくられたのか、九谷村での開窯との関係は何か。そこには加賀藩二代藩主、前田利常の意図が見られる。これらにつき、その時代背景とともに考察する。尚、有田という地名は明治以来のことで、本来は肥前というべきであるが、一般に有田が使われるので、ここでは、有田を使う。

## 1. 時代背景

世界は大航海時代と言われる時代であり、スペイン、ポルトガル、オランダ等から日本へ珍しい海外の品々がキリスト教の宣教師とともに渡来した。フランシスコ・ザビエルが日本に初めてキリスト教を伝える。当時天下統一を目指していた信長は、各地に根付いている仏教各宗への反発からキリスト教の布教に寛容であり、宣教師は各地で活躍をした。

秀吉の時代には、勢いを増すキリスト教に、宣教師の本国に対する警戒心が芽生え、秀吉はキリスト教禁教令をだす。ところが、宣教師とともにやってくる海外の珍しい品々への魅力は抑え

られず、秀吉の禁教令は徹底したものではなかった。しかし、国内では、禁教令のために数多くいたキリシタン大名は失脚し、その一人高山右近も秀吉の前田利家に対する信頼のもとに、加賀藩に身を置くこととなった。

加賀では、利家は高山を大切にした。その利長への遺言状には、高山右近を大切に遇するよう書かれている『石川県史「越登賀三州志 寛政10年成立」』（「第二編」）。その遺言に従うまでもなく利長と右近は非常に仲がよかった。二人は茶道を通して親しかった。利家は洗礼を受けクリスチャンネームを持ったともいわれるが、利長はクリスチャンネームを持たなかった。依然として続く幕府の禁教令の下、加賀藩主としては表立ったことはできなかつたのは当然である。

金沢では、右近は厚く遇されており、城にほとんど接するところに住居を持ち、石川門から出てすぐの紺谷坂に教会があった。また、右近は能登にも領地を貰い、そこも布教の拠点であった。当時の宣教師はローマへの手紙に「金沢には、長崎よりも大村よりも活発な教会がある」「金沢には多くの貴族（武士）の信者がいる」と書き送っている。また高山右近の娘ルチャは、当時の家老横山家の嫡男康玄に嫁いでいた。利長が隠居し高岡に移る時も、高岡城の縄張りも、高山右近がしたといわれている。

天下分け目の関ヶ原が終わり、加賀と江沼を拝領した返礼に上洛した利長は、帰路金沢の手前にある小松へ寄った。それまで小松城は丹羽長重の居城であったが、利長との和睦の折の人質として、長重には、猿千代（後の利常）が預けられていたのである。その時小松では、鷹狩りを催し大勢が見物に来ていた。そこで目に留まった猿千代を紹介され、利長は初めて30歳年下の弟、利常に会った『三壺記』（巻之十 宝永年間成立）。これ以後、利常の運命は変わっていく。利家の正室まつの子供ではない利常は、跡取りのいない利長の養子となり、家康の孫娘珠姫を正室として迎えることになる。利常8歳、珠姫3歳であった。そして利長は隠居し、利常は加賀藩二代藩主となった。利常13歳の時である。利常になっても変わらず、加賀藩はひそかに、高山右近を大切にしていた。上記、紺谷坂にはキリスト教教会があり、甚右衛門坂下には宣教師トレスがいた。

こうして9年が過ぎ、1613年（慶長18）暮れに家康のバテレン追放令がでて、高山右近はマニラに追放となる。「この知らせが来た時、利長は元旦の祝宴を催していた。すると親しい藩士たちが右近に一時偽っての転宗をすすめたが、高山右近は追放を選んだ。（大意）『石川県史』（第2編第6節）」。また右近は「金澤に在りし宣教師に對し、密かに、此の地に止まりて殘餘の教徒を慰籍せんことを囑し、之に関する方法を示したりき。（本文のまま）」右近が金沢にいたのは26年間。布教の時間の半分以上をここで過ごした。この発言の「之に関する方法」とは何だろうか？キリシタン武士たちは、都合上一時転教し、隠しキリシタンとなって幕府に従い、利常の出す厳しい禁教令の実施や取り締まりをおこなった。加賀藩ではキリシタンであった者の子孫は男子6代末まで「類族」と呼ばれ、監視を受けた。そして加賀では、キリシタンの影は全くなくなっていった。類族の消滅は、1864年（元治1）の事である。高山右近と一緒にマニラに行き、金沢に戻って棄教し、類族として監視を受けていた内藤徳庵の子孫内藤三知の死を持って、キリシタン

絶滅とされた『石川県史』（第2編第6節）。

高山右近はマニラへ去り、利長も同年、他界する。1614年（慶長19）11月、大坂冬の陣が起きる。この時は家康の期待むなしく、利常にはとりたてて手柄はなかった。しかし翌1615年（元和1）、加賀藩の武士たちは3200もの兜首をあげたのである。これにより利常は一躍、日本中に名が知られることとなり、参議に昇進する。利常23歳であった。

時はたち、1631年（寛永8）、この年利常は大坂夏の陣で手柄を立てた藩士へ恩賞の見直しをおこなう。それまで藩内には、大坂夏の陣での褒賞が少ないことに不満があった。それには、各人が申告を行い、これに従って応分の石高が追賞された『三壺記』（巻之十三）。

褒賞を受けた武士の数は、312名である。この年は藩政も整い、余裕もでき、金沢城の火事の処理も独自で行い、そして追賞など動きがあったので、幕府に謀反の嫌疑をかけられたが、家老横山康玄の必死のとりなしで事なきを得た。世に「寛永の危機」と言われる年であった『加賀藩史料』（第2編）。

そして1641（寛永18）～1650年（慶安3）頃、いよいよ「古九谷大皿」が登場する。九谷村の開窯とされている1655年（明暦1）よりも少なくとも5年～10年はやいのであるが、有田への色絵技術の渡来と有田から加賀への移動時期、そのほかをもとに考察するとこの時期となる。

## 2. 古九谷制作にかかわる利常の動き

色絵古九谷大皿は、当時は利常にしか作ることが出来ないものであった。その色絵技術もそれが描かれる磁器素地もさりながら、その大量の運搬においても、貯蔵においても、ある権力がなければ動かない。色絵技術については、有田とほぼ同じ時期に京都にも伝わり、野々村仁清も色絵に成功している。どのようにしてかは不明である。しかし、これらは磁器ではなく、陶器に描かれたものであった。京焼の素地は陶器である。色絵古九谷大皿が利常の時代であり、利常の意図のもとに作られたことはあきらかであるが、利常における最大の難所は、その動きが完璧に隠密裏でなければならなかったことである。なぜならば、それらは禁教令下、キリシタンシンボルを持つ大皿の製作であった。利常は、見事に成功した。そのための知恵を見ることが出来る。藩の記録の中で、1637年（寛永14）以降、利常の動きが目立つ『加賀藩史料』（第2編～第3編）。

1637年（寛永14年） お買い物係派遣・小松蓮代寺で瓦作りを始めさせる

この出来事は、全てのはじまりであるので、次項で詳しく述べる。

1638年（寛永15年） 年貢米の大坂登せ米を始める事により船で九州近くまで行けるようになる。人目に触れず素地のヤンベタ窯からの素地移入が可能になる。素地移入のことを考えると、この運送手段変更は、必須である。それまでは、米は、敦賀まで運び琵琶湖を使って大坂迄運んでいた。

1639年（寛永16年） 将軍家光へ小松への隠居願いをだす

小松では利常自身も蓮代寺に近くなり、大皿制作の様子がわかる。

この時、利常自身は養老料 22 万石をとり、藩を三つにわける。  
一番小さい藩は九谷村のある大聖寺藩 7 万石で万一の改易のためか。

1639 年（寛永 16）～ 40 年（寛永 17） 宮腰港を整備し二股にわける 佐那武神社社殿を増築  
片方に奉行を置き監視 佐那武神社から金沢城へ直結道路  
片方は一般に自由に出入りさせる 出来上がった古九谷大皿は、武士の  
監視のもと、佐那武神社に荷下ろしができ、直結道路で金沢城へ人知れ  
ず運ぶ事が出来る（下図参照）

1640 年（寛永 17） 利常 小松入城

慶安年間（1648 年～ 51 年） 西俣（山奥）の本光寺に、小松に所領を与え、本光寺は山を降り  
る 古九谷大皿の絵付け終了を意味する。燃料の炭は不要になった。素  
地への絵付けは、室内でもできる。小さな色絵窯で焼き付けられ、燃料  
には炭や薪が使われる。景德鎮では炭が使われた。  
『赤絵指南』（福原揺舟 書・画 1834 年）でも炭が使われている。加賀  
でも炭が確保されていることから、燃料は炭であったろう。小松侍帳で  
は本光寺は武士のいる三つの寺院のうちの一つである。

### 3. お買い物係派遣

1637 年 お買い物係派遣・お買い物係は、小松蓮代寺で瓦作りを命じられる この年、利常は  
長崎にお買い物係を派遣したとの記録がある『加賀藩史料』（第 2 編）。お買い物係の記録は珍し  
い。この一件はよほど重要だったと思われる。しかも帰ってきたお買い物係矢野所左衛門は、蓮  
代寺というところで瓦焼きを仰せつかっている『能美郡誌』（第 25 章）。奇妙である。この瓦は何



「加賀四郡絵図（正保国絵図）」より

国立公文書館蔵

佐那武神社表記は筆者

のためだろうか？ 城の瓦にしては、早すぎる。利常が小松城への隠居を願い出るのは2年後である。瓦焼きの窯では、焼きものができる。この時矢野は、表向きは供とともに茶の湯に使う高価な名物裂等を買うように仰せつかったが、それらとともに明陶工も連れ帰った。小屋掛けをして瓦焼きをさせたとある。瓦焼きは名目で、焼物の準備であろう。

矢野所左衛門には、実はこの旅の間に、ある失態があった。未然に防ぎ事なきを得たのだが、当然お咎めがあると家内親戚一同びくびくしていたところ、暮れにはお買い物係一同、利常からご褒美を頂いたので驚いた、という話がある『三壺記』（卷之十六）。

利常は、よほどうれしかったとみえる。書かれてはいないが、念願の色絵制作に手が届いたのである。

#### 4. 小松侍帳と飛地と炭倉

利常の小松入城は六月のことであったが、その年のうちにほとんどの者が小松へ引っ越した。その中に藩士のひとりひとりの名前、石高、住んだ町名が書かれている『小松侍帳』（図1）がある。そこにはただ一つ、地名ではない「炭倉」という場所がある。しかも蓮代寺という地名はない。利常は小松隠居の折、金沢から連れて来た武士のために小松に「海老町」を造った。蓮代寺には飛地があり、この飛地の名前は「海老町分け」である。飛地は海老町、つまり武士の住むところであった。他方、炭倉も武士が配属されている。つまり、炭倉の場所は蓮代寺の飛地のことになる。侍帳によれば、炭倉、つまり蓮代寺の飛び地には三人の武士が住んでいた。

現在の『蓮代寺町誌』には、所在不明で名前のみ残る「蔵屋敷」がある。これが飛地にあったと思われる。「蔵」は炭倉のことであろう。飛地は「出村のさんまい」ともよばれた。「さんまい」は火葬場のことで忌避する所という意味を持つ。この飛地は現在にいたるまで蓮代寺の住人にも謎の場所で、何があったか、だれがいたのか、全く不明ということだけが伝わっている。「さんまい」とよばせ、忌避する場所としてきたのであろう。

しかもこの飛地は、蓮代寺の隣村の三谷の中にあるため他から見れば三谷の中であって蓮代寺とは判らない隠れた場所である。飛地からは、三谷に住む小幡氏以外だれにも知られずに日本海へでることができた。また、飛地は山奥（西俣辺り）から炭を運ぶルートにつながっており「みぞきわ」とも呼ばれ、水路に沿っていた。（図2）

#### 5. 侍帳の中にある三つの寺院

小松には、現在も旧市街に多くの寺院がおかれている。これは、その昔利常が隠居したときに、門徒はそのままだ、小松城の周りに近隣の寺を集めたからだと言われている。なぜならば、小松は平野の真ん中にあり、いざというときに武士をためる場所がなかったからである。そのように多くの寺院が集まる中、ただ3寺院だけ武士がまもる寺院がある。

中でも注目すべきは、本光寺（西本願寺派）である。前述のようにこの寺は炭の取れる山奥に



寛永19年小松侍帳 (図1)



蓮代寺飛地 (矢印)

(図2)

竹内清臣氏提供

位置しており、しかもそこに500石取りの奥野市郎右衛門が守りについていた。いかに炭の確保に力を入れていたかが窺われる。この寺は褒美であろうか、予定された古九谷大皿制作が終了の頃、慶安年間に小松の寺町に所領をもらい、山を降りている。

国聖寺(建聖寺)の守りは300石取り九里五郎兵衛。完成古九谷大皿の貯蔵のためか、梯川から運河で、最短に位置している。利常とのつながりのある寺でもある。もう一つは立像寺。守りは140石の安田平右衛門。ここには利常の母寿福院の位牌が安置されていた。

## 6. 飛地の三人の侍と色絵技術の会得と保存

小松侍帳によれば、小さな飛地に三名もの武士が住んでいた。飛地は、現在は水田になっているが、当時は木々に覆われた小高い丘であった。

1000石取り富田吉蔵。吉蔵は奥野主馬の長男で、主馬の妻は前田利政の娘である。前田利政は利家の次男であり、利長の弟で七尾城に住んでいた。本来ならば利常ではなく、利政が藩主になるべき人であったが、そうはならなかった。利政の正室はキリシタン大名蒲生氏郷の娘であった。そのため利常は、利政の娘の結婚その他、奥野主馬には細やかな気配りをし、奥野家もまた、それに応えている。前出、山奥の本光寺にいた奥野市郎左衛門は、奥野主馬の実弟である『諸士系譜』。

200石取り 菊池市左衛門は利常のお使番で、長く利常に仕えた。川口久左衛門は、与力衆である。この武士達は、十年の間、飛地での明の陶工の絵付けを見るうちに技術を会得し、ここでの

色絵技術は、九谷村の開窯までは大聖寺藩のどこかで保存され、その後の九谷村開窯へと続いた。九谷古窯発掘の折には、色絵窯が発見されている。また、伝世品色絵大皿はヤンベタ窯の磁器素地といわれるが、明の陶工が九谷村で、磁器制作に取り組まないはずはない。実際に、当時有田にしかないはずの磁器が九谷村の発掘で見つかっている。また、後藤才次郎も磁器制作を志し、『能美郡誌』には、そのための陶石を五国寺で発見したとの記録もある。これが、後藤才次郎が最初に見つけた陶石であると書かれている。

古九谷には、幾何学模様の色絵大皿があるが、これには10年間大阪城の石垣普請に関与した菊池市左衛門の関与が結びつく。石垣の組み方には、計算が必要ではないだろうか。

古九谷の絵柄の手本となるものは、普通は入手できない厳しく門外不出とされた探幽の下書き、中国の詩と情景の本『八種画譜』、また漆器の図柄など、手本とするには素養が必要なものが多い。これらは、利常の関与がなければ、できないことである『稿本金沢市史』（工芸編）。

## 7. 後藤才次郎と対馬の釜山窯

追賞の為の飛び地での色絵大皿制作が終わった頃、1650年（慶安3）後藤才次郎は釜山にいたことが対馬の記録にある。朝鮮の釜山には対馬藩の領地、倭館があり、そこには釜山窯があった。この年、後藤才次郎は対馬の陶工大浦林齋と一緒に釜山におり、ここで、釜山窯の作り方を学んだと思われる。翌年大聖寺藩に戻った才次郎は、これから4年をかけて試行錯誤を繰り返し、九谷古窯を築きあげ、才次郎はついに1655年（明暦1）頃、九谷村で開窯した。

この釜山窯は有名な窯で、ここでは将軍からの注文品、御本茶碗を焼いていた。そのうちに朝鮮の土が手に入らなくなり、廃窯となったが、釜山窯は、もともとは肥前の窯を習ってつくられたものである。当然、肥前窯とつくりが同じであり、九谷古窯の発掘で、九谷古窯のつくりが肥前の窯と同じであるのは、当然である。しかし、肥前から直接習ったのではないことも確かである。

## 8. 有田皿山代官とのつながり

有田には、ヤンベタ窯から加賀蓮代寺飛地へ明陶工を手配できる人物がいた。1647年（正保4）初代有田皿山代官となった山本神右衛門重澄である。それまでも有田皿山一帯を手中にしていた人物であり、もともとは、山の森林管理が仕事であった。1637年（寛永14）の皿山から826人の陶工の追放『ARITA EPISODE2』（「history」）を発案、家老に進言し、実施したのも神右衛門であった。この人物が、ヤンベタ窯から加賀蓮代寺飛地への明陶工を手配するのは、わけもないことである。しかし、加賀に受け取り手がいなければ、成り立たない。実は、蓮代寺飛地には、神右衛門の10年来の知己、大坂城普請の時の仲間がいたのである。それは菊池市左衛門であった。この二人の連絡は利常の要望を叶え、矢野所左衛門は中国の珍しい布の買い物の一方、用意された明陶工を何人か加賀へ連れ帰ったのである。そして、瓦焼き（焼物）をさせた。

富田吉蔵、菊池市左衛門、川口久左衛門と明陶工たちは、素地の移入、顔料の入手、上絵窯の

手配、炭の手配など、神右衛門も巻き込み、試行錯誤を繰り返し、飛地で人知れず色絵大皿制作に励んだ姿が浮かびあがる。素地がヤンベタ窯へと注文が特定されるのも道理である。

もうひとつ、移入に有利なことがあった。それは、伊万里港には、前田とは遠く縁続きの大庄屋前田家があり、当時伊万里を牛耳っていたのである。しかも山本神右衛門重澄の夫人は、この前田家の人であった。磁器素地がうまく加賀藩に渡ることには、何の支障もなかったのである「伊万里郷大庄屋 前田家の歴史」。

### 9. 隠密裏の飛地での制作とキリスト教のシンボル

本稿における古九谷色絵大皿とは、伝世品古九谷大皿を対象としている。伝世品とは、古くから古九谷とされているもので、ほとんど全てが色絵大皿であり、その色絵が描かれる素地は磁器である。そして、これらが隠密裏であるのは、いうまでもなくそこにはキリスト教のシンボル（十字架、等と水）が表現されていたからである。当然ながら、キリスト教のシンボルは巧妙に隠されている。これらは、蓮代寺飛地で大坂夏の陣の時の追賞として必要枚数（312枚）を超える枚数が作られた。飛地での制作は隠密裏であった。自ら発する厳しい禁教令下、利常の意図は金沢の教会にあった洗礼盤を思わせる大皿を作り、これらの藩士に高山右近とその教えや天国について思いださせたかったことである。

もしかすると、金沢の右近の教会にあった洗礼盤は、明の色絵大皿であったのではないだろうか。

大坂夏の陣で活躍した藩士はすでに老境にあった。死について高山右近は何と言ったであろうか。高山右近も武将であり、首をとっている。何か救いが必要であるはずである。まだ、洗礼を受けていないひとは、この利常の大皿に水を入れ、洗礼をうけることが出来る。洗礼とは、キリスト教では父と子と精霊の御名において水を受けることで、罪を清め、神の子として新に誕生する儀式である。古九谷大皿は、そのための洗礼盤に似ているどころか当時の洗礼盤の条件を備えている。高山右近の時代の洗礼盤、五島列島の隠れキリシタンの洗礼盤、共通するものはキリス



高山右近の時代の洗礼盤（クルスと波模様） 十字紋三島俵手鉢（洗礼盤）

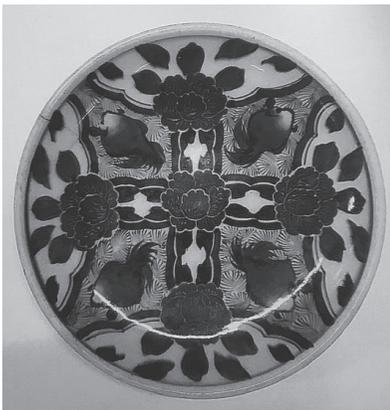
古田織部美術館蔵



五島列島隠れキリシタンのクルス皿  
クルスと波 (→水)  
堂崎天主堂蔵



古九谷 色絵菊文大皿  
クルスと植物 (→水)  
出光美術館蔵



五島列島隠れキリシタンのクルス皿  
クルスと金魚 (の水)  
堂崎天主堂蔵



古九谷 青手土坡に牡丹図大平鉢  
クルスと三つの花 (水) 三つの波 (水)  
石川県九谷焼美術館蔵

ト教のシンボルと水が表現されていることである。これは、古九谷大皿と言われるものにも共通する。もっとも古九谷では、巧妙に隠されながらである。飛地の存在も極秘であった。400年たった今も、世に知られていないのである。

#### 10. 利常による古九谷の意匠への計らい

利常は、画の題材について援助は惜しまなかったであろう。下記は、探幽の下絵を手本とした例である。『画筌』は、林守篤が1721年(享保6年)出版した狩野派秘伝の暴露本である。探幽の下絵もこの時から一般に見られることとなったが、古九谷大皿制作の頃は、勿論、探幽と利常



蓮葉に菱文大皿  
出光美術館蔵



はちす 部分  
『画筌』より



色絵鳳凰図平鉢の図（ぬりえ）



旭日五禽図 部分  
『探幽縮図聚珍画譜』より

の親密な関係がなければ、見られるはずのないものである。蓮の葉の上部の折れ曲がりにご注目頂きたい。

左上図の古九谷色絵鳳凰図平鉢の図は、石川県立美術館提供のぬりえである。この平鉢の図が、右上図の探幽の鳳凰を手本として描かれていることは、一目瞭然である。古九谷色絵鳳凰図平鉢では、右の探幽の画に一本（実は三本）の大きな羽根（左図ではぬりつぶし・筆者加筆）を右上から左下に加えて、バランスをとり全体でシンボルマーク X の形を作っている。古九谷色絵鳳凰図平鉢は、石川県立美術館に収められている。（『九谷名品図録』P. 32 参照）加えた羽根には青

海波が描かれている。上記、出光美術館蔵「蓮葉に菱文大皿」の菱形の枠の中にも青海波の模様がみられるが、植物と水は切り離せないとして、植物が描かれるときは、特に水は描かれないことが多い。

次の例は『八種画譜』の意匠に、意図してシンボルマークを書き加えているものである。

(図3)では、橋げたの下に上左図の手本(江邨夜帰)にはない大きな十字架が見える。また、(図4)では、皿の中央右上の松の幹でXマークを作っている。皿の周りの鳳凰もキリシタンマークであり、三羽という数もキリシタンマークである。「三」はよく使われるシンボルで、神と子と精霊の三位一体を表す重要なサインである。

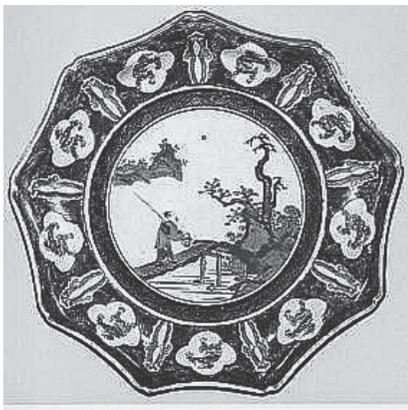
また、隠されたシンボルには言葉にもあり、まるで謎解きのようなものである。青手栗波文平鉢(『九谷名品図録』P. 47参照)では、葉の上に乗っている栗は栗の栖(巢)⇒「クルス」の音訳と思われる、栗の数も三個で海に浮かぶ。周りの縞模様も波を表している。京都の地名「栗栖野」は「クルスノ」と読む。

さらに、サクラメントの音訳と思しき「サクラ」⇒桜の花が海に浮かぶ図柄、青手桜花散文平鉢(『九谷名品図録』p. 46参照)もある。サクラメントは、秘蹟と訳され、洗礼その他の重要な儀式を表す言葉である。



江邨夜帰

『八種画譜 唐詩五言画譜』



色絵渡橋人物文九角皿

(図3) 『古九谷』より転載



色絵渡橋人物文大皿

(図4) 『古九谷』より転載

### 11. 明の陶工の関わりの証拠

飛地での制作は明の陶工の指導に始まった。

右の図の中には、当時の明にしかない模様がある。それは、スペードとハートである。当時、長崎には天正かるたや南蛮かるたというトランプゲームが入ってきたが、それらはドラゴンカードとよばれるもので、龍がモチーフであった。我々の知るハートやスペードマークのトランプは、明治になり、フランスから入ってきたものである。しかし明代中国には客家六虎牌というかるた遊びがあり、そこにはハートとスペードが使われている。明の陶工のいたことが判明する。皿は全体に十字の模様とスペードを埋める波模様のキリシタンマークがみえる。



五郎太夫在銘古九谷平鉢  
『九谷陶磁史鑑』より転載

### 12. 古九谷に見られるキリシタンマークの数々



魚



十字



エルサレム十字



洗礼の十字

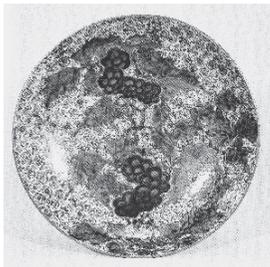


孔雀（鳳凰）



バラ（椿、牡丹）

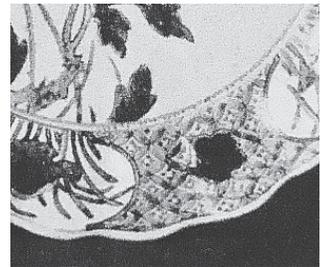
下記は、それぞれの一例である。



(魚)  
色絵花卉文 大皿  
出光美術館蔵



(X字) (十字)  
古九谷色絵鏝小紋手鉢  
『九谷・鍋島・柿右衛門名品集』  
より転載

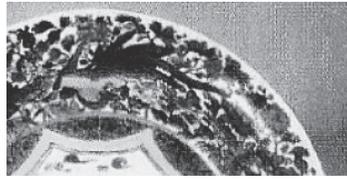


(エルサレム十字)  
輪花大鉢牡丹に蝶 (部分)  
『陶器図録第9』より転載

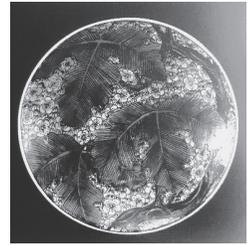




(洗礼の十字)  
色絵蘆花水禽文蓮葉形大皿  
出光美術館蔵



(鳳凰)  
色絵渡橋人物文大皿  
(部分)



(三)  
青手梅笹に樹木葉文平鉢  
石川県九谷焼美術館蔵

### 13. ヤンベタ遺跡の色絵断片について

近年、ヤンベタ窯の傍にヤンベタ遺跡が発見された。そこからは、古九谷酷似の色絵断片が大量に発見された。これは、明らかに、有田へ色絵技術が伝わった証拠である。有田では1647年(正保4)頃、酒井田柿右衛門が色絵を日本ではじめて作ったと公にしていることから、それ以前の産物であるこれらの断片が意味するものは、鍋島藩がひそかに鎖国下に貿易をしていたということである。何故、貿易が許されていたかという点、明人の作ったものだからである。これは、本来許されていない私的貿易の例として、鎖国下の松前藩の昆布の輸出も、昆布を扱うのは日本人ではなく、アイヌであるからというものであった。この時期はヤンベタ窯の理由不明の閉窯と重なることから、幕府に密貿易と悟られることが懸念され、商品である完成品は壊し断片にして埋め、素地のためのヤンベタ窯は壊したことが示唆される。そのため完成品は一つも発掘されず、有田にも残っていない。そもそも、色絵は描きなおし、焼き直しができるので、失敗作を壊すことはなく、断片は意図して壊さなければ、出ないものだからである。古九谷大皿においては、明らかに絵具がはじかれているものも、大切に保存されている。(図5参照)

このヤンベタ遺跡にいた貴重な色絵技術を持つ明陶工は、どこへ行ったのであろうか。加賀における飛地での色絵技術が九谷村開窯まで大聖寺藩で保存されたように、鍋島藩が藩邸内で密かに焼物を続けさせることはできたとおもわれる。

### 14. 飛地での古九谷大皿制作の証拠

白山をモデルにしたと思われる古九谷大皿を紹介する。この古九谷のキリシタンマークは、三峰の白山の「三」と「家」である。そして、波が描き込まれてい



古九谷青手団扇文大皿  
(図5) 小松市立博物館蔵



蓮代寺飛地辺りから見た白山  
竹内清臣氏撮影



松平忠輝の遺品の古九谷  
貞松院蔵  
貞松院の「寺宝紹介」より  
貞松院 (teishoin.jp)

る。当時の教会は「家」で表現された。この白山の三峰は、蓮代寺からは見えない。しかし、ほんの少し南東にずれた蓮代寺の飛地からは、現れるのである。

## まとめ

1655年頃に開窯された九谷古窯にとらわれずに、その時代背景、藩主利常を取り巻く環境と意図するものを探ることにより、一つの流れをみることができた。

加賀藩では、大坂夏の陣での藩士の手柄があった。3200もの兜首である。藩士たちが老境に差ししかかり、否応なく死を考える時となった。このキリシタン藩士たちのお陰で地位を得た利常は、藩士たちに高山右近の説いた天国を思いださせようとした。折しも、滅亡しつつあった明から色絵技術をもつ陶工が海外へ逃げ、渡来して有田皿山で色絵を焼いていることを知った利常は、加賀で、右近の時代の洗礼盤と同じ条件であるキリシタンシンボルと水の意匠を持つ色絵大皿を作らせ、藩士への褒賞とした。明陶工の加賀行きは、有田の山本神右衛門と加賀の菊池市左衛門との連携により、1637年買物係矢野所左衛門によって実行され、三人の侍の守る蓮代寺の飛地で、密に古九谷色絵大皿は誕生した。古九谷大皿が与えられるべき藩士の数以上になった時、その制作は終わり、追賞として、藩士に与えられた。相前後して1650年、後藤才次郎は対馬藩を通して倭館(釜山)へ行き、窯の作り方を会得し、大聖寺にもどり、藩主利治の命に従い、九谷古窯の開窯をめざした。およそ5年後の開窯まで、飛地での色絵技術は大聖寺藩内のどこかで保存された。この時代の色絵には、無論キリシタンマークはない。また、大皿である必要はなく、形も小型である。もはや不要である危険なキリシタンマークを持つ色絵大皿を払拭すべく、九谷古窯では、意図して色絵や大皿ばかりでなく、大小様々な形や種類の焼物が生産されたことは、その後の発掘調査が示している。

## 今後の課題

科学的に、飛地で色絵制作がなされたことを証明できないだろうか？

それが今後の課題である。蓮代寺には、黄土がある。黄土は太古から使われている顔料である。色絵制作に使わない手はないであろう。また銅については当時、それまで各地で様々に作られていた銅銭が、1636年（寛永13）幕府により寛永通宝が作られたために使用がご法度となるも捨てられず、寺の鐘や仏像に作られた時期にあたる。瀬戸では、薄くなった銅銭が発掘される。加賀藩でも多くの銅銭があぶれていたに違いない。江戸時代の緑の顔料である緑青の作り方は、銅に食酢であった。これも飛地でつくることが出来る。黄色も緑も古九谷にふんだんに使われているのは、顔料が豊富だったのかもしれない。

古九谷自体について調べることの難しさの一つは、調べる対象を見つけることの難しさにある。伝世品古九谷大皿は、桁外れに高価であることに加えて、ほとんどは美術館に納まっていて、まず手が届かない。しかし、東京大学医学部跡の発掘により、旧加賀藩邸跡の破片、見ただけで古九谷と分かる意匠を持つ破片、有田の窯からの破片等から当時の状況を知ることが出来る。これらは火事（1657年明暦の大火）によって破壊されているが、逆に、年代は特定され、破壊された時代からそのまま、変化していないことは、その時代を確定するためにはかえって有利である。多くなされている研究の中で、「東京大学医学部附属病院入院棟A地点から出土した色絵磁器色絵の具の分析」新免歳靖、顧錦娟、水本和美著」では、この大火による色絵破片を時代と場所に分け、色絵の顔料について細かく測定場所を決め、蛍光X線分析が行われている。ただし、この論文では、古九谷は有田古九谷様式と分類されている。この論文からわかることは多く、それをもとに、考えることができる。

①有田でも、加賀でも、黄色の発色にはFe（鉄）をつかっている。アンチモン等他の発色元素はない。同様に、緑にはCu（銅）を使っている。そして、融点を下げるためには、Pb（鉛）が使われている。

②有田の黄と加賀の黄を比べると、Mn（マンガン）の量に違いがみられる。有田にはほとんど、含まれていない。しかし、蛍光X線分析は、定量されているものではないので、これで、結論は出せない。一方、蓮代寺の黄土を水籤して作った手製の顔料の成分分析を石川県九谷焼センターに依頼したところ、Mnが含まれていることがわかった。一般の黄土顔料の成分分析一覧を見ると、Mnが含まれているものは、あまりみられない。

③現在進行中であるのは、江戸時代の文献と近代のゼーゲル式を併用して当時の透明釉薬を作り、蓮代寺黄土顔料の発色をみることである。まだ1回目であるが、結果は橙色に近い発色があった。加える顔料の量が多すぎたのであろうか。まだまだ、何度も試みる必要がある。

筆者自身の経験は浅く、謎は深く、解決に到達するには今、入口に立ったところである。

## 謝意

飛地の存在、蓮代寺資料については、代々蓮代寺にお住まいで、蓮代寺の歴史に詳しい竹内清臣氏（故人）がおられなければ、知りえないことでした。また、古九谷大皿にキリシタンの影を発見された酒谷努氏（故人）氏のお陰で、古九谷大皿が禁教令下作られていることに目を向けることができました。心より、感謝もうしあげます。

## 参考文献

- 『九谷名陶図録』 石川県美術館 1978年  
『石川県九谷焼美術館常設展図録』 石川県九谷焼美術館 2014年  
『九谷 日本の陶磁13』 島崎丞 保育社 1979年  
『古九谷』 財団法人出光美術館 2004年  
『高山右近とその時代』 石川県立美術館 2003年  
『九谷古窯跡発掘調査報告書』 石川県教育委員会 2007年  
『小松と前田家』 小松市立博物館 2002年  
『小松城』 小松市立博物館 1987年  
『九谷焼の系譜と展開』 東京ステーションギャラリー 2015年  
『バタヴィア城日誌1』 東洋文庫170 平凡社 1970年  
『バタヴィア城日誌2』 東洋文庫205 平凡社 1972年  
『バタヴィア城日誌3』 東洋文庫271 平凡社 1975年  
『倭館』 田代和生著 文春新書 2002年  
『やきものと釉薬』 大西政太郎著 理工学社 1996年  
『出光美術館研究紀要』 「肥前磁器と八種画譜」 荒川正明著（5）1999年  
『古伊万里の誕生』 伊藤和雅著 吉川弘文館 2001年  
『蓮代寺町誌』 蓮代寺町誌編纂委員会 1977年  
『能美郡誌』 石川県能美郡編 1923年  
『石川県江沼郡誌』 加賀市文化財専門委員会 1971年  
『三壺記』 山田四郎右衛門著〔他〕元禄頃 石川県図書館協会 1931年  
『越登賀三州志』 富田景周著 1884年 益智館 石川県図書館協会 1973年  
『重修 加越能大路水経』 日置謙校訂 石川県図書館協会 1931年  
『加賀藩史料』 前田育徳会 清文堂出版 1930年  
『石川県史』 日置謙著 再版 石川県編 1938年～1939年  
『大聖寺藩史』 大聖寺藩史編纂委員会 1938年  
『大聖寺藩産業史の研究』 山口隆治著 桂書房 2000年  
『稱名寺史』 稱名寺史編纂委員会 2001年

- 『古九谷の神秘』 久藤豊治著 北國出版社出版局 2008年
- 『九谷焼』 正和久佳著 理工学社 2001年
- 『真実の古九谷』 二羽喜昭著 新風社 2007年
- 『古九谷論争の最期』 二羽喜昭著 時鐘社新書 2010年
- 『古九谷論争の真実』 二羽喜昭著 北國新聞社出版局 2005年
- 『九谷もジャパンである』 北國新聞社編集局編 2009年
- 『《古九谷》研究批判』 正和久佳 郷土史料研究所 1992年
- 『慶長元和小松侍帳』 森田良見 手写 1843年 石川県立図書館森田文庫
- 『諸士系譜』 津田信成 1832年 石川県立図書館蔵
- 『加賀百万石異聞 高山右近』 北國新聞社 2003年
- 『有田陶磁史』 山辺田遺跡の出土品(38) | 有田町ホームページ (arita.lg.jp) 2017年
- 『キリスト教のシンボルとその意味』 キリスト教のシンボルとその意味 (ancient-symbols.com)
- 『近世日本陶磁器の系譜』 中嶋敏雄  
<http://www.ab.cyberhome.ne.jp/~tosnaka/author/author.html> 2012年
- 『加賀市史』 加賀市 加賀市史編纂委員会 編 1978年
- 『関西大学東西学術研究所紀要巻12』  
「江戸時代の日中交流(上) — 釜山窯の御本焼物をめぐって —」 泉澄一 1979年
- 『九谷』 陶磁大系22 西田宏子著 平凡社 1978年
- 『鍋島』 陶磁大系21 今泉元佑著 平凡社 1972年
- 『山辺田遺跡の出土品』 有田町ホームページ (arita.lg.jp)
- 『唐津焼の研究』 中里逢庵著 河出書房新社 2004年
- 『有田町歴史民俗資料館報No.18』 「皿山びとの歌」 有田町ホームページ 1992年
- 『校註葉隠(本文)』 山本常朝述 田代陣基編 1716年 校註者栗原荒野  
中村郁一編 丁酉社 1907年 佐賀県図書館データベース
- 『大阪城普請分担図』 高橋写真(株式会社) 宮内庁書陵部蔵 1979年
- 『明・清時代の上絵窯』 関口広次 金沢大学考古学紀要 26 2002年 196705231.pdf (core.ac.uk)
- 『炎の里有田の歴史物語』 松本源次著 松本源治出版 1996年
- 『伊万里郷大庄屋 前田家住宅』 伊万里市大坪公民館 (現 大坪コミュニティー)
- 『広報 伊万里』 No.567 (特集古伊万里文化の薫る街づくり) 伊万里市 2001年  
No.567 (H13-5).pdf (city.imari.saga.jp)
- 『稿本金沢市史』 工芸編 金沢市 金沢市編 活文堂 1925年
- 『赤絵指南』 福原揺舟 書・画 1834年 国会図書館蔵
- 『画筌』 卷2 林守篤著・画 書林/須原屋茂兵衛〔他〕1721年 金沢美術工芸大学蔵
- 『東京大学構内遺跡調査研究年報14 2020年度』

- 「東京大学医学部附属病院入院棟 A 地点から出土した色絵磁器色絵の具の分析」  
新免歳靖、顧錦娟、水本和美著」 東京大学埋蔵文化財調査室
- 「有田の陶磁史（192）～（196）」 有田町歴史博物館 2021 年
- 「ARITA EPISODE2「history」」 有田市 2016 年
- 『九谷陶磁史鑑』 松本佐太郎著 古九谷研究会出版 1929 年
- 『九谷・鍋島・柿右衛門名品集』 山本定次郎編 山本商会出版 1934 年
- 『陶器図録第 9』 倉橋藤治郎編 工政会出版部 1933 年
- 『九谷名品図録』 石川県立美術館 編集発行 1986 年
- 『八種画譜』 黄鳳池 編 集雅齋発行 明代 国立公文書館蔵
- 『探幽縮図聚珍画譜』 上巻 狩野応信著 松井忠兵衛〔他〕1885 年 国立国会図書館蔵